http://www.labornetjp.org
日本から世界から はたらくものの 情報ネットワーク
レイバーネット

Newsletter
No.92
2023年11月15日

発行　レイバーネット日本
〒173-0036　東京都板橋区向原 2-22-17-108
http://www.labornetjp.org
labor-staff@labornetjp.org
電話　03-3530-8588　FAX　03-3530-8578

一緒につくろう！レイバーフェスタ 2023

―ドキュメンタリー『日本人 オザワ』日韓同時公開―

レイバーフェスタ 2023 は 12 月 16 日（土）札の辻スクエア「港区産業振興センター大ホール」で開催されます。2002 年 12 月に、＜「労働」を観よう 聴こう 話そう＞をスローガンにスタートした「レイバーフェスタ」は今年で 22 回目です。みんなでつくるレイバーフェスタ。３分ビデオ・川柳を今年も大募集します。あなたも「つくって」参加しませんか。いまパレスチナでウクライナで、たくさんの人々が理不尽に殺されています。日本政府は「平和国家」の道を捨てて「戦争する国」にひた走っています。世界はどうなってしまうのか。私たちの「生活・平和・人権」はどうなってしまうのか。そんな中、今年のレイバーフェスタが開かれます。メイン映画は、働くものの国際連帯を描いた韓国 KBS ドキュメンタリー『日本人 オザワ』。レイバーネット共同代表の尾澤邦子さんが主人公の作品です。声を上げることからしか「希望」は生まれません。さあ、文化の力で跳ねかえそう！ あなたもレイバーフェスタへ。（詳細はチラシ参照してください）

●プログラム　12月16日(土)13時～19時

13:00　開演
　韓国KBSドキュメンタリー「日本人 オザワ」(2023年・100分)
15：00　音楽　「いなのとひら・のとこば」
　　「難民・移民と共生コーナー」「ノレの会」
16：15　川柳 公募川柳入賞作発表（講評 佐高信）
16：40　講談「房総・花物語～戦時下で花を守った母と子」
17：20　三分ビデオ 15 本一挙上映

演 目 紹 介

★ドキュメンタリー映画『日本人 オザワ』
（2023 年／ 100 分／監督 イ・ホギョン／韓国 KBS）

海を越えた日韓労働者の連帯のたたかいの歴史を描いたドキュメンタリーが 2023 年 12 月に完成する。本社からのFAX1 枚で、工場閉鎖・全員解雇を通告された韓国スミダの労働者。1989 年 11 月、韓国スミダ労組の４人が来日し、翌年６月まで遠征闘争を行った。「鬼が住む」と聞いていた日本で、言葉もわからず、解雇撤回を求め、団体交渉の要求をつきつけた。その後も韓国山本、韓国シチズン、韓国サンケン、韓国ワイパーなどの労組が、遠征闘争で来日した。韓国スミダ闘争から 33 年。韓国の労組・労働者に寄り添い、案内・支援を中心で担ってきたのが「日本人　オザワ」（尾澤孝司・尾澤邦子）だった。韓国の KBSTV が、12 月の木曜夜のドキュメンタリーで、２週連続で放映する。撮影・編集は、KBS のイ・ホギョンプロデューサーで何度も来日して、熱心に取材を重ねていた。出来たてホヤホヤのドキュメンタリーが、レイバーフェスタで初公開される。

★音楽コーナー
「いなのとひらの・とこば」
稲野真人さん率いる３人組フォークユニット。2017 年８月、NHK-FM の「第２回 フォークおやじバトル」でグループ部門で優勝した。その後、NHK から放送禁止を宣告されたメッセージソングを引っさげ、世相、政治の社会風刺や多様性を歌いつづけている。人間愛に溢れたお茶目な三人組に、きっとあなたも虜になる

「難民・移民と共生コーナー」
当事者と一緒にミャンマー民主化運動の歌やスリランカの童謡、いろいろな国の歌を歌いましょう。

「ノレの会」
たたかいの中から生まれた韓国民衆歌謡を歌います。

★新作講談
「房総・花物語～戦時下で花を守った母と子」
戦時下の千葉県房総半島、食料増産が叫ばれ、花農家が畑に花を植えると３年以下の懲役刑という「花禁止令」や、種や球根の「焼却命令」が出された。その中で「非国民」「国賊」と言われながら花を守った母と子がいた。花を守り抜いた人々のおかげで、戦後の花畑を速やかに復活させ、花を待ち焦がれる人々に届ける事ができた。その母と息子の実話を元に、1964 年に田宮虎彦が小説「花」を発表。つづいて 1989 年には堀川広通監督が高橋恵子主演の映画「花物語」として映画化した。社会人講談師・甲斐淳二さんが、小説と映画をもとに語る、講談版の『房総・花物語』をお楽しみください。

【賛同人・賛同団体募集】
フェスタの財政を支えてください。ぜひ皆さんのご協力をお願いします。なお賛同者には、参加費割引・チラシ折込・物販などの特典があります。
賛同金　個人１口 1000 円　団体１口 3000 円
郵便振替　00150-2-607244「レイバーネット日本」

今後のレイバーネット活動案内
●レイバーネット TV193 号　11 月 20 日（月）
　レイバーネット TV194 号　12 月 13 日（水）
　「映画と本で振りかえる 2023 年」（永田浩三）
●レイバーフェスタ 2023　　12 月 16 日（土）
●総会　2024 年３月ごろ

レイバーネットＴＶ（2023 年後期）アクティブに発信中！

レイバーネット TV は、＜ 2023 年後期＞放送を展開中です。毎回、重要でホットなテーマを取り上げています。とくに 191 号「ヤマト運輸」はアクセスが 7300 以上、192 号の「原発汚染水」は 3200 以上に伸びています。これまで 1000 が壁でしたが、楽々と越えました。レイバーネット TV への注目度が高まっています。なお 11 月の放送では「パレスチナ問題」を取り上げる予定です。働くものの目線から「マスコミができない･やらないテーマ」に取り組んでいきたいと思います。

●「やさしい猫」「入管」をめぐってビッグ対談（189 号 9/13 放送）

「やさしい猫」が NHK のドラマで、９月 25 日から再放送があるくらい大人気だ。テレビのない私に友だちが、本を貸してくれた。ぐんぐん引き込まれた。何しろ七面倒くさい法律を分かりやすく説いているし、物語としてもドキドキだし。フィクション小説の著者は、だからといって入管法など、事実と違う作り事を書くわけにはいかないと、緻密な下調べをしている。だからこそ、この物語は人の心を打つのだと思う。この小説の誕生に深くかかわった指宿昭一さんの持ち込み企画だが、この小説が読まれ、ドラマが観られることで、日本国内に住むすべての市民が直面している、バカ気た入管の外国人に対する差別対応をやめさせる力になると信じたい。それにしても深刻な問題にもかかわらず、「指宿昭一・中島京子」のビッグ対談で、スタジオは終始、笑いの絶えない明るい雰囲気で進んでいった。（笠原）

●日韓労働者連帯の深さを実感 ～尾澤孝司事件を特集（190 号 9/27 放送）

テーマは＜話し合いを求めることは罪なのか？－尾澤孝司事件「9.11 判決」を考える＞。番組では、上野真裕弁護士を中心に、2023 年９月 11 日の「罰金 40 万円・有罪判決」の不当性をさまざまな角度から明らかにしました。こうしたデタラメな労働運動弾圧の手口は、関西生コン弾圧事件と同じもので、戦争に向かう時代の危機の表れでもありました。番組では、韓国サンケン労組のキムウニョンさんが、ソウルからオンラインで出演しました。キムウニョンさんは「尾澤孝司さんはお父さん、お兄さんのような存在で、家族と思っている。強い信頼をもっている。だからコロナ下で遠征闘争ができない中でもここまで闘えたし、成果を上げた」と。孝司さんも「韓国サンケン労組のたたかいに学び教えられた。あきらめない精神がすごい」と応えました。日韓労働者連帯の深さを実感させる番組になりました。

●ヤマト運輸 3 万人首切り問題を深掘りする（191 号 10/11）

いまヤマト運輸で進んでいる３万人大量首切り。10 月 11 日のレイバーネット TV では、この問題を取り上げた。番組には、契約解除という名で解雇通告された高本博純さん（ヤマト運輸国立営業所 / 三多摩労組加入）が出演して、その実態を語った。なにより驚いたのは、高本さんが契約解除を知ったのはヤフーニュースだったこと。そんな大事な話をヤマトは本人より先にメディアに発表していたのだ。高本さんは「クロネコ DM 便」などの配達業務に携わってきた勤続 26 年のベテランである。「クロネコ DM 便」の郵政移管に伴い、高本さんら３万人の「個人事業主」が切られる。しかし声が上がらない。それは「委託契約」というマヤカシの制度を会社が悪用して、「解雇でなく契約解除」という形でやろうとしているからだ。それとどうたたかっていくのか？ 三多摩労組書記長の朝倉れい子さんが大いに語った。また「ヤマト協業」で混乱する郵政職場の実態を戸村学さんが紹介した。

●「汚染水」情報操作の裏側をおしどりマコ・ケンが暴露！（192 号 10/25）

ゲストは、おしどりマコ・ケンさん。焦眉の問題「原発汚染水」を取り上げました。早口でしゃべりまくる「マシンガントーク」のマコさんですが、重要な話と面白い話の連続でした。徹底した取材をつづけるおしどりマコ・ケンの成果が凝縮した番組になりました。汚染水放出は「風評被害でなく実害だ」とはっきり語った旅館業者の証言を、テレビニュースはねじ曲げて報道していました。マコさんは、その改変の手口を実際の証言映像とニュース映像を比べて解説しました。いかに情報が操作され「世論」が作られているかがわかります。アクセス急増中、「おしどりマコさんのお話、とても分かり易く、面白く、内容が濃くて勉強になりました」の声が寄せられています。

財政報告

2023 年７月時点で会財政の手持ち金額が 40 万円を割り、みなさんに会費カンパのお願いしたところ、多くの方から協力があり、現在 70 万円台にまで持ち直しました。本当にありがとうございました。安定財政のために、引き続きの会費カンパの納入を節にお願いします。宛名のところに納入状況が記載されています。同封の振替用紙をご利用ください。（事務局）

歩み続けるレイバーネット

（季刊『フラタニティ』第 32 号より抜粋）

小さなメディアの大きな役割

松原　明

「はたらくものの情報ネットワーク・レイバーネット」は 2001 年２月に発足した。ことしで 23 年目になった。よく続いたと思う。そんなわけで、この『フラタニティ』の連載タイトル「歩み続けるレイバーネット」は、世界一貧しいウルグアイの大統領ムヒカの言葉「人生で一番大事なことは、成功することでなく歩み続けることだ」からいただいた。

2001 年に同会が発足したときは、私は 50 歳。他のメンバーも同じくらいで、それから 22 年経つわけだから高齢化は否めない。現在は 550 人の会員がいるが、毎年訃報が出るようになった。最近では、中心で活動してきた木下昌明さん（映画批評家、享年 82 歳）や山口正紀さん（ジャーナリスト、享年 73 歳）が亡くなった。毎年 10 人ほどの新入会者がいるが、全体として高齢化が進んでいるというのが、レイバーネットの現状だ。その傾向はどこの左翼系団体も同じであろう。

●高齢化の波をこえて

高齢化の波は、ウェブサイトのマシンでも起きている。わがレイバーネットのウェブサイトは、実はボロボロなのだ。レイバーネットは、2001 年に日本で初めて「ZOPE（ゾープ）」というアメリカのソフトを使って立ち上げたサイトだった。ID があればだれでも直接投稿できるなど双方向性があり、先駆的な仕組みだった。しかしそれも 20 年以上経つとマシンも劣化しトラブルが増えるようになった。2017 年 12 月に 17 年働いた渡辺照子さんが「派遣切り」された記事をスクープ掲載した。これが大反響でヤフーニュースなどに取り上げられると、レイバーネットにアクセスが集中して、ウェブサイトが一日ダウンする事件があった。数十ならともかく数百レベルでアクセスが集中するとダウンするとは情けない。これを機会に、サーバーの新規入れ替え、システムの再構築を真剣に考えるようになった。

ことし７月、某ネット業者に相談してみた。データを全面移行し新サイトを作り直す場合の手続きや経費のことである。その返答がメールであった。「貴社のサイトには２万ページを超えるページ数が登録されているようです。一日に 10 頁ずつ移行したとしても、2000 日かかることになります。金額的な見積りとして最低 1000 万円以上はかかるでしょう。また構築までに約半年程度の期間が必要になります」と。これには驚いた。100 万円以下でできると思ったらとんでもない。単位が違うのだ。なので、全面作り直しはあきらめて別の方法を探ることにした。このとき「最低 1000 万円以上」と聞いて、私はほくそ笑んだ。見方を変えれば「レイバーネット」の情報蓄積「価値」が 1000 万円以上ある、ということなのだ。23 年、コツコツやってきたことがこんな形で「評価」されてうれしかった。

●尾澤孝司事件でさいたま地裁判決

最近報道した「尾澤孝司事件さいたま地裁判決」について触れたい。韓国サンケン争議で支援者の尾澤孝司さんは、話し合いを求めて構内に入ろうとした際に警備員を押したという理由で起訴されていたが、その第一審判決が９月 11 日にあった。法廷は「警備法廷」で建物のなかにも多数の警察官が配置された異常なものだった。判決は「罰金 40 万円」の有罪判決。サンケン電気・警察・検察・裁判所が一体となったこの弾圧事件は、戦争体制にすすむ日本の象徴的事件だった。つまり「モノいう労働者・労働運動の徹底排除」である。この判決の取材をしたのは、レイバーネットと韓国 KBS のみ。日本の大手新聞に一行も報じられることはなかった。同様の事件として「関西生コン弾圧事件」がある。こちらは土屋トカチ氏（レイバーネット事務局長）が、映画『ここから』を制作し、映像による「反撃」を開始している。

そんな状況のなかで、「レイバーネット」の存在と役割は重要なのだと改めて思った。世の中はユーチューバー時代で動画発信はあたりまえで、「レイバーネット」はけっして目立つ存在ではない。しかし「たたかう当事者の声」「労働現場からの発信」「マスコミがやらない・できない情報発信」という意味での存在意義は大きい。いま憲法第九条をかなぐり捨てて「戦争する国」に向かう日本。「汚染水」という言葉さえ話せなくなった日本。そんな時代だからこそ、これに抗してしっかり発信していきたい。小さなメディアの大きな役割を信じて。（レイバーネット日本共同代表・全文は『フラタニティ』で）

＊本稿は、季刊『フラタニティ』第 32 号（2023 年 12 月１日）からの抜粋転載です。季刊『フラタニティ』ロゴス 700 円（アマゾンで購入可）年間：3500 円（送料共）。レイバーネットの会員が定期購読する場合には、会員であることを通知するとロゴスの商品券 500 円が提供されます。

レイバーネット日本、会員募集中

現会員数 550 人 ウェブアクセス１日 6000
会員になれば、メーリングリストやウェブサイトを使って、ニュース・イベントなどの情報提供／企画提案ができます。ネットを通して全国にアピールできる絶好の場所です。あなたもこのネットワークに加わりませんか。
　A 会員　年 3000 円（通常）
　B 会員　年 5000 円（通常＋ TV サポート）。
〈入会申込用アドレス〉
apply@labornetjp.org　TEL03-3530-8588

新 会 員 紹 介

●映像で「非正規公務員問題」を広げたい

山岸薫

非正規公務員運動をしている山岸薫です。7月のレイバー映画祭に「わたしは非正規公務員」という短編映画を出品しました。映像チームの皆さんのおかげで「東京新聞」一面（写真）にも載せていただきました。また、今年「非正規公務員 voices」という団体を当事者と経験者で立ち上げ活動しています。非正規公務員の問題は市民の問題でもあるので、市民の皆さんに協力をしていただけると嬉しいです。ぜひ HP をみてください！ 非正規公務員 VOICES（https://f.2-d.jp/voices/）。また、私は以前映像制作の仕事をしていたこともあり、今後も映像で社会問題を表現していきたいと思っています。レイバーネットの特に映像チームのみなさん、これからよろしくお願いいたします！

●二回りも三回りも心身共に太りました

福原時夫

レイバーネットとの関わりの最初はいつか？ と記憶を辿りました。それは堀切さとみさんとの出会いから始まりました。映画『原発の町を追われて・10 年』を皮切りに、滑川町古民家ギャラリーかぐやでの講演会、2023 年のレイバー映画祭と続きました。極めつけは、8 月の毛呂山町高岩仁記念館でのレイバーネット泊まり込み合宿での歴々の方々との出会いです。特に、その合宿で大学の恩師柄谷行人にインタビューされたばかりの土田修さんとの出会いは、その後の私の活動を拡げてくれました。何年も前から関わっていたような中身の濃い活動に参加させて頂き、私は二回りも三回りも心身共に太りました。今後とも末長く宜しくお願い致します。

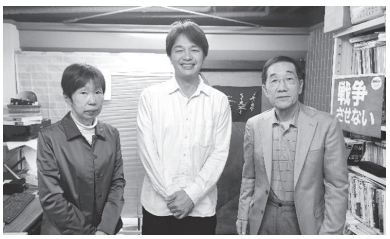
各プロジェクト／会員の活動から

●シネクラブ　映画『福田村事件』をめぐって

9 月 30 日、レイバーシネクラブでは『福田村事件』の討論会を開催しました。20 名が参加で大盛況。久しぶりに顔を見せてくれた人、映画監督、クラファン出資者、元新聞記者、組合活動家、在日三世、……実に多様な人たちが集まりました。「加害の歴史に踏み込んだ作品を、よくぞ作ってくれた」というのが、大筋の感想でした。その上で、引っかかること、危うく感じることを仄めかす意見もありました。 たとえば、 この映画は日本の加害の歴史について描いているのが、流言飛語を放出し、平気で人をあやめるというあの雰囲気を作ったのは誰なのか。そこへの切り込みが弱いのではないかというような。いずれにしても「違和感」に目を向け、意見を出し合うことの大切さを感じました。討論を踏まえて、もう一度観に行くという人も。いろいろなところで討論会がやられていますが、若い人たちの感想も聞いてみたいと思いました。（堀切さとみ）

●あるくラジオ：楽しい学校めざす宮澤弘道さん

「あるくラジオ」第 26 回（10/28）のゲストは、東京都の小学校教員で多摩島嶼地区教職員組合委員長の宮澤弘道さんでした。打ち合わせの定刻 5 分前に現れた宮澤さんは、頼れるお兄さんのような人。現職教員そして組合の委員長ならではの、学校現場のリアルなお話を聞くことができました。まず最初に驚いたのは、宮澤さんが教員になるまでのお話でした。宮澤さんは高校生のときに、東ティモールの井戸掘りのボランティアに参加し、内戦のさ中、命がけで学んでいる現地の子どもたちを見て、教員になる決意を固めたそうです。無気力で自殺まで考えた高校生活が、ここで変わりました。しかし、家庭の事情で大学進学を断念。働きながら通信教育を受けて、大学の卒業資格と教員免許を取得しました。大学を出て簡単に教員免許を取得した人たちとは、ちょっと違う、いや大きな違いのあるスタートでした。このお話を聞いて、なぜか現在の彼の活躍が理解できたように思いました。（佐々木有美）



●力をもらった！～映画『ここから』韓国で上映

映画『ここから「関西生コン事件」と私たち』の韓国語版が完成した。10 月 31 日には試写会がソウル市内で開かれ、韓国建設労組からパク・ミソンさん（本部副委員長、女性委員会委員長）をはじめ、ソウル近郊の女性委員会メンバーが多数参加したほか、民主労総法務院、市民団体から参加者があった。韓国ではユン政権による労働組合弾圧の嵐が吹き荒れている。とりわけ、ユン大統領自身が閣議で建設労組を「建暴」（建設現場の暴力集団）と悪態をついて批難し、政権ぐるみの弾圧が 仕掛けられている。参加した組合員たちは、映像で描き出される日本での弾圧の実態、そして、大量の脱退者を出しながらも組合を去ろうとしない関西生コンの組合員たちの姿に、食い入るように見入っていた。終了後は、夜遅くまで交流会がつづき、「力をもらった」と何人もの組合員が語ってくれた。「私は日本に対しては、ちょっといろいろな感情があるけどね。でも、労働組合でたたかっている人の熱い気持ちは同じなんだなと思いました」と話す、組合員歴 23 年の女性もいた。

（写真＝土屋トカチ氏を囲んでの交流会）